

# 歴史資料室だより

④

## 近藤喜則 史料展示室

= 2 =

今号では近藤喜則の3つの大きな業績のうち、教育に関して蒙軒学舎を取り上げます。

### 人材育成への思い

近藤喜則は、若い頃から親戚でもあった、伊豆の江川太郎左衛門英龍の家老柏木家に入りし、英龍の考えに感銘する中で子弟教育（「修身立志」）に強い関心を持つようになりまし。明治新政府の世になると、喜則は人材育成の重要性を悟り、すぐに動き出します。明治2年（1869）、地元の子どもたちの教育の場として妙浄寺の一室を借り



蒙軒学舎での授業風景(イメージ)

「聴水堂」を開設します。  
豊島住作との出会い

きっかけは、旧幕臣豊島住作との出会いでした。漢学者であった豊島は函館戦争に敗れ、父の友人である喜則を頼りました。

喜則の教育にかける思いに深く共感した豊島は、任されて10数人の子どもたちを教えました。（豊島は1年で去りますが、英明で包容力のある喜則を生涯にわたり敬慕し、近藤家との深い繋がりを持ちました）

### 蒙軒学舎の成立

明治4年（1871）、聴水堂は「蒙軒学舎」と名を改め、独立の教場での教育が始まります。喜則の人脈や長男露太郎、二男麟次郎の努力のおかげで、旧幕臣や「同人社」（中村正直主宰塾）から優れた講師陣が集まります。評判を聞いて県内はもろろん東海各県からも優秀な人材が入塾し、翌年には89人の生徒を擁するまでになりました。

3年後には旧本陣内に寮を併設した塾舎が完成し、講義室、自習室、蔵書3千

冊の図書室、食堂など寄宿学校の体裁が整いました。

### 特色ある教育

教育スタイルは、読み書きや算盤中心の寺子屋教育と異なり、討論や話し合いを中心としたもので、塾生の主体性や課題探求力が重んじられました。書くことも重視され、校内誌『以文

### 先進的な英語教育

特筆すべき事として、県内初、全国でも珍しいネイティブによる英語教育が行われたことが挙げられます。明治10年（1877）夏、

カナダ人宣教師イビーが南部を訪れ、約1か月間、聖書やギゾーの「文明史」などの講義を英語で行いました。鎖国政策が終わってまだ10年、蒙軒学舎の先進的な取り組みには目を見張るものがあります。

イビーの来訪は、塾生から、西洋文明の中心にあるキリスト教について知りた



イビー

雑誌』（レブリカを展示）を發行、生徒に発表の場を与えていました。

また、洋書を読ませ、西欧の知識を習得させることにも力を注ぎました。これらは、当時としては画期的なもので、令和のいま目指している教育が、150年前の南部で行われていたことに驚かされます。

いという要望が上がり、教頭の露太郎が招請に尽力。同人社で教えていた来日2年目のイビーに、同人社人脈を通じ声をかけたのです。イビーは夜や休日には村々で宣教活動も行いました。

### 各界で活躍の出身者

塾生出身者には、文部大

「蒙軒」の名前の由来についての文献は今のところ見当たりません。

しかし、喜則は若い頃から中国の古典に親しんだことから『易経』の中にある「蒙」に関する知見をもっていたことが想像されます。易経によると「蒙は行

### 蒙軒の由来

蒙軒学舎の教育と

重なることから、「蒙軒」は『易経』から採った名前と考えられるでしょう。

明治17年（1884）、塾生は28名となり、最盛期の3分の1にまで減少しました。明治政府の教育制度が整備され、私塾へ志願する人間が減ったことが主な原因です。その後、明治21年（1888）には学舎経営の中心的存在であった長男と二男が病気で相次いで他界。蒙軒学舎は閉塾のやむなきに至りました。